岡山 史料ネット Newsletter Vol. 12 2024. 9

襖下張りはがし作業

活動報告（2024 年 3 月～ 2024 年 8 月）

1．資料修復活動

H 家の資料洗浄作業が 5 月 8 日（水）に扇などの少数の物品を除いて完了しました。これにより、これまでボランティアのみなさんと取り組んできた西日本豪雨の際にレスキューした資料約 1,700 点の洗浄作業を終えることができました。また、7 月 29 日に修復と調査および写真撮影を終えた T 家文書屏風下張り文書を所蔵者に返却しました（4 頁参照）。レスキューされた資料については、M 家文書の写真撮影が残っているという状況です。

その後、6 月からは 2023 年 4 月に寄贈された F 家文書の整理に着手しています。6 月には無酸素殺虫を終えた資料を保存用の収納箱に詰め替え、7 月からはふすまの下張り文書のはがしとり作業を始めています。

2．岡山市災害ボランティア展に参加

岡山史料ネットが加盟している、岡山市災害ボランティアネットワークが主催する災害ボランティア展が 7 月 26 日（金）・29 日（月）に岡山市役所本庁舎で開催されました。今年度も活動内容を紹介するポスターを掲示しました。

3．2024 年度総会・活動報告会を開催

8 月 4 日（日）にノートルダム清心女子大学で今年度の総会・活動報告会を開催しました。総会では昨年度の活動報告と決算、つづいて 2024 年度予算や運営体制などが承認されました。続いて、「「思い出の写真」を残す―真備から能登へ―」と題した活動報告会を開催し、真備写真洗浄あらいぐま @ 岡山の森田靖さんと福井圭一さんから話題提供いただきました。森田さんからは卒業アルバムの具体的な修復手順、福井さんからは西日本豪雨直後から始まった写真の洗浄ボランティアが真備だけでなく各地のみなさんによって取り組まれたことなどを伺い、意見交換しました。ハイブリッドを含め、約 30 名の方が参加されました（2 ～ 3 頁参照）。

（文責・松岡弘之）

「思い出の写真」を残す ――真備から能登へ――

■福井圭一さん（真備写真洗浄あらいぐま@岡山）

真備で写真洗浄の活動をしてきました。5 年と 7 ヶ月が経ち、ひと段落しました。長い活動になるだろうことは予測していましたが、ここまでやることになるとは思っていませんでした。それだけ被害が大きく、さらに求められていたということだと思います。

活動は発災から約 3 ヶ月経った 2018 年 9 月末より、倉敷市災害ボランティアセンター内で始まりました。当初は災害支援の色合いがより強かったと思います。参加者は県外からやってくるボランティアさんが多かったです。災害 VC 内で活動した意義はとても大きかったです。作業が進みましたし、担い手が増えました。活動の認知も広がりました。

写真洗浄は数ある災害支援活動の中でも比較的長期化する傾向を持ち合わせています。それは東日本大震災の頃からそうでした。そのために敬遠されることもしばしあります。災害の「片付け」という側面だけ考えるとそうなりがちです。ですが人々の生きた証を守ることは、とてつもなく大切なことです。人々の心に寄り添い、目には見えない価値を守ることは、見落とされがちですが絶対に必要なことです。

長くなるということはある程度の覚悟も必要ですが、逆に考えると、あまり気負わない方が続けられる。それを証明したのが真備町写真洗浄だったと思います。

災害 VC を離れてからの活動は、地域活動そのものでした。いつ来ても良い、いつ帰っても良いという気軽に参加できる活動スタイルは、参加者の生活サイクルに組み込まれ、作業場は地域の交流拠点として機能しました。次第に被災された方々も担い手として加わるようになり、近隣住民の率が高くなりました。新型コロナ流行以降はとりわけ顕著で、地元でやっていくしかないという状況になりましたので、自分たちで地域の写真を守るんだという意識は高かったと思います。

誰かの写真を守ることは、それ自体が実りの多い作業です。作業しているボランティアさんも、それぞれ自身の写真を持っています。写真の大切さを知っています。生まれてから大人になるまでの成長記録、学校生活、家族や故人との思い出・・。誰にも忘れがたい写真があると思います。誰かの写真を大切にすることは、自分の写真を大切にする延長上にあるような、不思議な共感を覚えます。自分の家族写真に向き合うように、被災された方々の写真に向き合いました。写真洗浄の活動は人々の共感力に支えられる活動だと思います。

共感の輪は町内に留まらず全国各地に広がってゆきました。真備では作業のアウトソーシングということもしていました。真備にやってきたボランティアさんが、それぞれの地域に作業を持ち帰り、それぞれの場所で活動を始めました。洗浄自体は現地でなくてもできることです。作業の分業化で写真洗浄の活動は各地に広がってゆきました。

当初は真備のサポートをしていたそれぞれの団体さんは、やがて主体的に動き始め、他の被災地を支えることになります。西日本豪雨の後にも各地で災害が発生し、それぞれの地域で写真洗浄活動が発足しました。

地域の写真を守ることは、そこに住まう人たちの文化を守ること。そう捉えています。今後も写真洗浄の輪を広めてゆきたいです。

真備での活動の様子

■森田靖さん（真備写真洗浄あらいぐま@岡山）

1958年名古屋生まれ。小さいころから写真好きだった。白黒現像が当たり前の時代、自宅で夜間現像処理をしていた。中高のころから趣味として写真を撮影して自分で引き延ばすことをやっていた。岡山大学（夜間部）に進学後は写真の仕事に就職する。

当時は白黒が主流で自家処理が普通のことだったため、自分で写真を扱うことが苦にならない。むしろ、好きで得意なので写真洗浄をすることは当たり前のことだった。

2011年の東日本大震災のあと、岩手県遠野市で写真洗浄ボランティアと出会い、倉敷市が定期運航していたボランティアバスで倉敷に持ち帰り、倉敷市社会福祉協議会と写真洗浄を行う。それがあったので真備で倉敷市社会福祉協議会と一緒に写真洗浄を始めるのは当たり前のことだった。あとは吉備人出版から出版された『残す』の掲載ページを参照。

「卒業アルバムの構造と最適な処理方向とは？」
そもそも、写真と印刷物の違い。紙は水を使って製造しているので、水に浸けると溶ける。写真を印刷する表面のつるっとしたところは表面加工がしてあり、塗工紙とも呼び、でんぷん質と粘土を薄く塗り、ローラーで圧延乾燥している。また、合紙と呼ぶ厚紙に印刷をした紙を貼り合わせてあり、そこも接着のため糊をつかっているため、濡れたら固着しやすい。

固着した卒業アルバムを処理している様子を動画にした。泥水に浸かり濡れた後、長い間かかって乾燥してしまった冊子は、表紙をはずし水に浸けて取り出し、表面の水分をとる。また水に浸けて、また取り出すことを繰り返し、内部まで水を浸透させ開きやすくする。実際に処理している動画を Youtube　https://youtu.be/CTnvpBr6dVE　にアップしているので見てほしい。

そして、残念ながらうまく開かなかった箇所も少しずつはがして、補正をしていく。もし、濡れて固着した卒業アルバムがあればあきらめずにチャレンジしてほしい。

活動報告会

《参 加 記》

友次勇登（岡山大学２回生）

過去に類を見ない災害が全国各地で起こる現代社会において、写真という人々の思い出をいかに残すのかについて、考えさせられた。

家の浸水・倒壊といった災害を経験したことも、災害ボランティアをしたこともない私は、水損写真の存在を今回初めて知った。お話を聞くなかで、人々の思い出が詰まった写真を残すことの大切さや、その復旧活動によるコミュニティ形成という側面を学ぶことが出来た。

今後の課題として、「水損写真を復元できることや、被災写真の復旧活動について、認知されていないこと」を挙げられていたのが印象的だった。確かに、水害の影響を受けたら、写真が全部ダメになると思い、処分してしまうだろう。しかしながら、写真に刻まれた家族の大切な思い出は、残すことで復興の希望にもなり得る。

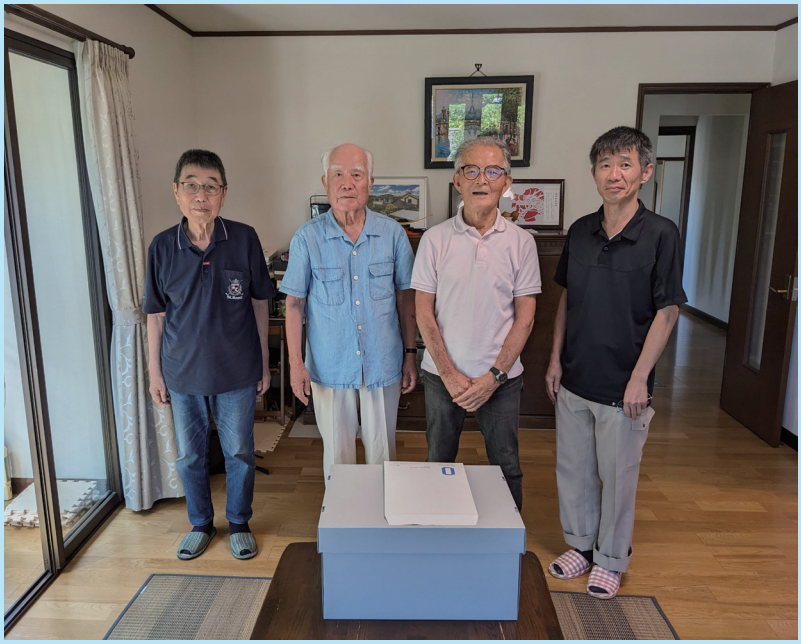
将来、行政業務に携わりたいと考える私にとって、課題解決に行政が果たす役割が大きいのではないかと考えた。今回お話していただいたようなアライグマ作戦の方々を講師に招いて、市民に広く水損写真の応急処置などを学ぶことで、少しでも多くの写真が残ることにつながるのではないだろうか。また被災後には、写真を復元できることを市民・ボランティアに周知させ、身元の分からない写真を持ち主に返却する作業も行うことが出来る。

備えあれば憂いなしというように、いざ写真が被災したときについて、市民・行政がともに考える機会を設けるのも必要なのではないだろうか。

富岡家の屏風下張り文書を返却しました

2024 年 7 月 29 日に富岡家屏風下張り文書を所蔵者の富岡理弘さんに返却しました。富岡さんのお宅からレスキューした屏風の表面に描かれた絵画については、2020 年 1 月に返却を終えていましたが、屏風の下張り文書が約 400 点含まれており、引き続き修復と目録の作成、写真撮影を行っていました。下張り文書そのものは、補強用に紙を貼りつぐ際にもとの紙が切断されるなどするため、内容も断片的なものが少なくありません。しかし、助郷役という運送に関する負担軽減を求めた文書や年貢に関する記録など、江戸時代に真備町域を治めていた岡田藩と地域の関わりを示す文書も含まれていました（詳しくはニュースレター第 7 号に山下香織さんの記事をご覧ください）。そのほかは村上定右衛門という岡山藩士と思われる人物に関する記録も含まれていましたが、真備との関係は現時点ではよく分かっていません。

真備の富岡さんのご自宅に伺ったのは、たいへん暑い日でした。「まび創成の会」として西日本豪雨の伝承活動などに取り組んでおられる、森脇敏さんと三宅勲さんも来られて、返却をたいへん喜んでくださいまいた。被災直後に貴重な地域の歴史の資料なのだから捨てないようにしなくてはいけないとして富岡さんのもとを訪ねて声かけをされたことなど、当時の様子をお話くださいました。また、修復を終えた資料が地域の貴重な財産として展示などで活用されるよう取り組んでいきたいとも仰っておられました。（松岡弘之）



富岡家文書の返却（7 月 29 日）、左から三宅さん、富岡さん、森脇さん、史料ネットの山下さん

歴史資料保全活動への支援募金のお願い

被災状況の調査や、被災資料のレスキュー、クリーニング作業など、活動継続のための資金が必要です。募金にご協力いただける方は、下記口座にお振り込みいただければありがたく存じます。

ゆうちょ銀行総合口座（普通口座）
【記号】15470 【番号】38569531　岡山史料ネット（オカヤマシリョウネット）
（他の金融機関からの振込の場合）
【店名】五四八 【店番】548 【預金種目】普通預金 【口座番号】38569531

事務局　〒 700-8530　岡山市北区津島中 3-1-1　岡山大学文学部日本史研究室内
電話　086-251-7406
e-mail　okayamasiryonet@gmail.com
URL　http://okayamasiryonet.s1008.xrea.com/
X（旧 Twitter）@okayamasiryonet

岡山史料ネット Newsletter Vol.12　2024 年 9 月 30 日発行　　編集・発行　岡山史料ネット
記事・写真等の無断転載はかたくお断りします。